
ある作家の記者会見

無一物無一文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある作家の記者会見

【Nコード】

N2337BA

【作者名】

無一物無一文

【あらすじ】

ある国で最も権威ある賞を受賞した小説家の授賞式。

私は今日、この国で最も権威のある賞を受賞し、その記者会見を受けるため、とある会館の控え室にいた。

今日は私にとって華々しい一日であり、誇り高い一日であり、後世に名を残す一日である。

素晴らしいことだ。踊りだしてしまうことだ。実際踊ってみた。椅子の足に脛ぶつけた。泣いた。嬉しくて泣いた。じいんとする想いが胸の奥から込み上げて泣いた。それぐらい嬉しかった。

「先生、お時間です」

扉を開いて顔を出した案内係が、涙目の私にそう告げた。

私は背筋を伸ばし襟を正すと、案内係に頷き控え室を後にした。

薄暗い廊下。一步一步近づいていく記者会見会場。

「こちらです」

案内係が静止し、扉に手をやった。鼓動が高鳴るのがわかる。扉の隙間から徐々に光が漏れ広がっていく。新世界。新たな一ページ。記者たちのざわめきが聞こえる。私は呼吸を整えると、会場に足を踏み入れた。

「みなさま、お待たせ致しました」

私の歩みに合わせるように、司会が紹介を始める。

「本日、この国で最も権威のある賞を受賞致しました」

私は用意された席に腰を下ろし、

「作家」

堂々と前を見た。

「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（＾o＾）／ ちんどろす三世先生です」

後世に名を残す記者会見が、今、始まる。

「まずは、受賞おめでとうございます。もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^）／ ちんどろす三世先生^{はるこ}」
「ありがとうございます」

A社記者の言葉にやや緊張しながらも、丁寧に受け答えすることを心がける。なんといってもこの国で最も権威のある賞なのだ。全国ネットで生中継なのだ。下手なことはできない。

「後ほど、総理大臣からお祝いの言葉をいただく予定ですが、今のお気持ちはいかがですか。もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^）／ ちんどろす三世先生^{はるこ}」

「大変、光栄に思います」

B社記者の質問にそう答え、一度、口を閉ざす。なんといってもこの国で最も権威のある賞なのだ。口を滑らせてはいけないのだ。下手なことは言えない。

「沢山の方々にお祝いしていただき、人生最高の日だと思います」
私は言い終えると、緊張のため渴いた喉を潤そうとコップに手を伸ばした。

「あつ」

指先がコップに触れた瞬間、コップが倒れ水が零れる。

「先生！」「大丈夫ですか先生！」「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^）／ ちんどろす三世先生^{はるこ}！」「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^）／ ちんどろす三世先生^{はるこ}！」「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^）／ ちんどろす三世先生^{はるこ}！」
／ ちんどろす三世先生^{はるこ}！」

一斉に焚かれるフラッシュ。会場が騒然となる。

「だ、だだいじょ、大丈夫大丈夫大丈夫ですから！」

人生の晴れ舞台。後世に名を残す記者会見。なんという失態だろうか。世話係が即座にやってきてテーブルの上を掃除する。このままではいけない。なんといってもこの国で最も権威のある賞なのだ。

会見は厳かに執り行われなければならないのだ。なんとしても名譽の挽回を計らねば。

「えー、では、改めて会見を再開したいと思います」

テーブルが片付いたのを見計らって司会が場を仕切りなおした。

「質問よろしいでしょうか、もなこびつち まんてりゅおりゅ……」
「質問をしようとしたE社記者が囁んだ。」

「す、すみません、ももなこびゅつちゅ」

また囁んだ。

「あ、う、ももこひつち……」

会場全体の視線がE社記者に集中する。なんといってもこの国で最も権威のある賞なのだ。受賞者の名前を囁むなど許されないのだ。会見に出席する記者は一流でなければならない。

「申し訳ありませんが」

世話係の一人がE社記者の肩に手を置いた。青ざめた顔で肩を落とすE社記者は、静かに会場から出て行った。

会場の空気が重い。

正直、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「すみません、質問いいですか？」

恐ろしい惨劇を目の当たりにし、戦々恐々としている記者たちの間からH社記者が手を上げた。

「どうぞ」

司会が許可を出す。私はただ祈ることしかできない。

「先生のお名前は大変個性的であると思うのですが、そのお名前をペンネームにしようと思った経緯などお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「えっ!？」

思わずH社記者を見つめ返してしまった。

「あ、お聞きしてはいけなかったでしょうか？」

H社記者が言いよどむ。会場がざわめきだした。これはまずい。なんといってもこの国で最も権威のある賞なのだ。答えられないこ

となどあつてはならないのだ。後ろめたいことなどなにひとつあつてはならない。

「い、いいえ、そんなことは……」

動揺を隠そうと、頭を抱えながら必死に思い出すフリを始める。そもそも、なぜ私はこんなペンネームで作家業など始めてしまったのだらう。確か始まりは、友人Yに新人賞応募用原稿を読んでもらったときのことだと思う。

私の作品を読んだ友人Yがペンネームの欄を見て物足りないと言出し、何事も第一印象が大事だとペンネーム会議を重ねた末、某巨大掲示板のあるスレで安価合戦を繰り返して現在のペンネームに決定したような気がする。

そして、その完成稿を応募しようと思ったのだが、大手出版社はなんか自信がなかったので中堅所、正確に言えば中堅より少し下（前年度の応募総数275作品）のZ出版社に応募してみたのだ。

そしたらなんとということだらう。見事、選考を勝ち抜き審査員特別奨励敢闘健闘入賞投稿激励参加賞をいただくことができてしまった。正直、出版社の正気を疑った。

とりあえず出版社から電話がかかってきたので、私はイの一番に「こんなペンネームでいいんですか？」と尋ねた。出版社のX編集者は「ペンネームなんて飾りです。ワナビにはそれがわからんのです」と答えた。この編集者は駄目だと思った。だが私にはこのデビューのチャンスを逃すことはできなかった。

それからというもの、私は頑張った。頑張った。頑張りに頑張った。痔になった。胃潰瘍になった。利き手が折れた。工作もした。自演もした。鳴かず飛ばずだった。酒を買う金もなかった。どん底だった。死ぬしかなかった。

だが、捨てる神あれば拾う神あり。とある有名ブログが私の作品を取り上げた。私は瞬く間に第一線に躍り出た。テレビとかにも出た。司会者と会話が成立せず残念な子扱いされた。ラジオとかにも出た。無言時間が長く、あやうく放送事故だった。雑誌の取材も受

けた。発売日に買いに行ったら内容が捏造改竄されていた。明らかに終わっていた。終わっていたはずなのに一部で熱狂的なファンがついた。素人にはわからない作品と言われた。哲学であり文学であり人生だった。正直、作品だけ一人歩きしていた。私は完全に置いてけぼりだった。

どうしたらいいのか悩んだときもあった。友人Yが「悩めるうちが花さ」と励ましてくれた。励ましてくれた三日後、友人Yは行方不明になった。私よりも友人Yのほうが悩んでいた。X編集者も「先生のおかげで会社が一部上場ひやつふーい」と励ましてくれた。お給金も上がったそうだ。どうでもいい。

とりあえず、私は対人スキルを鍛えた。人付き合いも頑張った。人脈の輪が広がった。世渡りがうまくなるにつれていろいろ好転し始めた。ちよつと甘いラブロマンスもあった。赤裸々な暴露本もだされた。あの子は初めから暴露本出版が目的だったらしい。私も友人Yのように行方不明になりたかった。芸能リポーター軍団がそれを許してはくれなかった。

まあ、いろいろあったが私の本は出版するたびに大ヒットした。そして今日を迎えたわけである。

「……………」

言えるわけがなかった。なんといつてもこの国で最も権威のある賞なのだ。某巨大掲示板の安価合戦で決めましたとか、言えるわけがなかった。言った瞬間、私の存在が闇に葬られる可能性があった。「実は……………」

私は深く息を吐いた。

「私には長らく付き合いのあった親友とも呼べる友人がいました。私と彼は、アツ、と言えば、ウツ、というくらい長く深く太い絆で結ばれており、私にとって彼は、飴をあげたくなるような特別な存在でした」

両手で顔を覆う。

「そんな彼が、ある日突然この言葉を残して行方をくらませたので

す」

嗚咽を漏らしてみた。

「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^） / ちんどう
す三世……」

初めは弱く。

「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^） / ちんどう
す三世」

だんだん強く。

「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^） / ちんどう
す三世！」

顔を上げ力強く。

「私にとってこの言葉は、彼が最後に残してくれた、大事な、大切な、特別な言葉なのです！！」

立ち上がって力説した。

静まり返る会場。重い。張り詰めた空気が痛い。外したか。外してしまっただろうか。

「……先生」

「はい」

「その言葉に、そんな特別な事情があつたなんて……」

H 社記者は声を震わせると、涙を流して泣き始めた。

「感動した！」

A 社記者が立ち上がって手をたたき出した。

「さすが、この国で最も権威のある賞を受賞した、もなこびつち
まんてりおる\$おわた＼（^o^） / ちんどうす三世先生だ！」

B 社記者も立ち上がって拍手を始める。

「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^） / ちんどう
す三世先生！」「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（^o^）
/ ちんどうす三世先生！」「もなこびつち まんてりおる\$おわ
た＼（^o^） / ちんどうす三世先生万歳！」「もなこびつち
まんてりおる\$おわた＼（^o^） / ちんどうす三世先生万歳！」

「もなこびつち まんてりおる\$おわた＼（＾ｏ＾）／ ちんどろ
す三世先生万歳！」

次々に沸き起こる歓声と拍手の嵐。正直、その名前を連呼するのはやめていただきたかった。

「みなさま、お気持ちわかりますが、どうか、どうかお静かにお願いいたします」

そう言ってみなを静めようとしている司会の顔を見ると、鼻水をたらして泣いていた。

この会場には馬鹿しかいなかった。

／（＾ｏ＾）＼

早いもので、あれから3年の月日が流れた。

私は今日も元気に小説を書いている。友人Yはいまだ行方不明だが、時折、手紙が届くようになった。金を送って欲しいそうだ。だが、その手紙にはどこに送ればいいのか一切書かれてない。おそらく、彼なりのジョークであろう。

X編集者の勤めるZ出版社は横領が発覚して倒産した。X編集者は「明日からどうやって生きていけば……」と嘆いていたが、今の私には他社とのつながりもあるので、どうでもいい。

では、そろそろこの物語にも幕を下ろそうかと思う。

また、どこかで。

P・N 鈴木 佐藤

終幕

（後書き）

昔書いた小説です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2337ba/>

ある作家の記者会見

2012年1月5日22時45分発行